

## 中国浄土教所依の経論序説

柴 田 泰

### はじめに

中国仏教はまず経論の訳出から始まる。思想家たちは訳出された経論を絶対の真理とし、それを依りどころに独自の思想を成立させ展開していった。それでは中国浄土教は如何なる経論を依りどころとして浄土思想を考え、信仰し実践したのであろうか。

この点について、われわれが直ちに想起するのは法然（1133-1212）の「三経一論」である。

『選択本願念仏集』法然（『浄土宗全書』巻七、5-6頁）

初正明往生浄土教之者、謂三経一論是也。三経者、一无量寿経、二観無量寿経、三阿弥陀経也。一論者、天親往生論是也。……、今者唯是弥陀三部、故名浄土三部経也。弥陀三部者は浄土正依経也。

次傍明往生浄土之教者、華嚴法華随求尊勝等<sup>(1)</sup>明諸往生浄土之行之諸経是也。又起信論宝性論十住毗婆沙論攝大乘論等、明諸往生浄土之行之諸論是也。

一切経を数回読破したと言われる法然は、浄土思想を説く多くの経論を知っていたにもかかわらず、三経一論を正依、その他の経論を傍明と選択し、浄土宗の独立を宣言した。それはインドでも中国でも成しえなかった点で、画期的なことである。その弟子親鸞（1173-1262）も

『教行信証』教巻（『真宗聖教全書』二、2頁）

夫顕真實教者、大无量寿経是也。

と表明し、自らの思想大系を確立した。

このように、日本の浄土宗・浄土真宗の正依の経論は三経一論・大无量寿経であることはよく知られている。

翻って、インド浄土教はどうであろうか。インド撰述の浄土思想に言及する経論は漢訳に限ると290部がすでに藤田宏達博士によって指摘されている<sup>(2)</sup>インドでは、中国・日本のように浄土教所依の経論という査定はないから、これらがそのままインド浄土教の様相を示す所依の経論ということになろう。従って、インド浄土教は極めて多くの経論によって考えられ、多様に展開した。

インドでは300部に近い経論によって浄土教が展開した。日本では三経一論のように峻別された極めて少ない経論によって浄土教が発展した。その中間に位する中国浄土教はどうであろうか。

こうした視点から中国浄土教資料を調べると、中国では浄土教は独立した宗派にならなかったこともあって、明確に浄土経論を査定した資料は極めて少ない。そこで、本稿では多少とも浄土経論の査定を意図した三資料、迦才『浄土論』（7世紀）・宗暁『楽邦文類』（1200年）・袁宏道『西方合論』（1599年）を取上げよう。ほぼ、4-500年の成立を隔てる三資料によって、中国人の考えていた浄土

教は何であったか、その所依の経論は何かの一端を窺い、以って、その後になすべき課題の序説としよう。

## 1 迦才『浄土論』の十二経七論

中国浄土教において、最初に浄土経論の査定が認められるのは迦才『浄土論』の「十二経七論」である<sup>(3)</sup>それは後の法然「三経一論」に大きな示唆を与えた<sup>(4)</sup>この査定の中国における影響は明らかでないが、「十二経(七論)」は290部の浄土経論の中でも最も代表的のものであり、中国浄土教正依の一部と言い得るものである。このことは後の二資料(『楽邦文類』『西方合論』)の査定を知ると、より納得されよう。撰者迦才の年代は明らかでないが、道綽(562-645)を讃仰し、善導(613-681)に言及していないから、7世紀中葉と考えられる<sup>(5)</sup>

「十二経七論」は『浄土論』三巻、分って九章四五問答体からなる「第五章引聖教為證謂引経論二教」に認められる。迦才は当該経論の引文を挙げた後に簡単な自釈を述べる。自釈には迦才独自の経論解釈が認められるので、本稿では引文抄出と自釈を挙げる。

『浄土論』巻中(大正47・91下-97上)

### 第五 引聖教為證謂引経論二教

経引十二部。一無量寿経、二観経、三小弥陀経、四鼓音声王経、五称揚諸仏功德経、六発覚浄心経、七大集経、八十方往生経、九薬師経、十般舟経、十一大阿弥陀経、十二無量清浄覚経。

論引七部。一往生論、二起信論、三十住毘婆娑論、四一切経中弥陀偈、五宝性論、六龍樹十二礼、七摂大乘論也。

経教者。

#### ①無量寿経第一巻(大正12・267下-269上)

設我得仏。国中有地獄餓鬼畜生者、不取正覚(第一願、以下第十六、二、十二、十五、十八、十九、二十、三十四、三十五、三十九願文抄出)。

釈曰。依此四十八大願中文、一一願中皆云、十方人天乃至女人。都不論不退已去諸菩薩也。

余願為菩薩。当知、前者是正、後者兼也。

#### 第二巻(272中下)

仏告阿難。其有衆生、生彼国者、皆悉住於正定之聚。……唯除五逆、誹謗正法(第十一、十七、十八願成就文)。仏告阿難。十方世界、諸天人民、其有至心、願生彼国。凡有三輩……(三輩往生)。

#### ②観経(『観無量寿経』大正12・341下、346上)

爾時世尊告韋提希。汝今知不。阿弥陀去此不遠。……欲生彼国者、当修三福(三福浄業)。

仏告阿難及韋提希。下品下生者……是名下輩生相、名第十六観(下々品往生)。

釈曰。依九品生因中、皆分前三福浄業、作九品因。亦不独一人具三福浄業也。

#### ③小弥陀経(『阿弥陀経』大12・347中)

舎利弗。衆生聞者、, 应当発願願生彼国。……執持名号、若一日…若七日、一心不乱。其人臨命終時……即得往生阿弥陀仏国土。……

釈曰、依此經、少善根是空發願、廣善根是七日念仏、若能七日念仏滿百万遍、即得往生也。

④鼓音声王經 (『阿弥陀鼓音声王陀羅尼經』大正12・352中下)

……爾時、世尊告諸比丘。今當為汝、廣說西方安樂世界、今現有仏号阿弥陀。……、若有受持彼仏名号、堅固其心、憶念不忘、十日十夜……。十日之中、必得見阿弥陀仏、並見十方世界如来。……、垂終之曰、阿弥陀仏与諸大衆、現其人前、安慰称善。是人即得往生。

釈曰。依此經、十日念仏即見阿弥陀仏。不論命終時也。

⑤称揚諸仏功德經 (大正14・99上中)

復次舍利弗。西方去此十万億刹、有世界、名曰安樂。其国有仏、号阿弥陀如来……。若有得聞無量寿如来名者……、其人當得無量之福……、命終之後、皆當往生彼刹土。……、念之如念父母……。其有信不讚歎称揚阿弥陀仏名功德、而謗毀者、五劫之中、當墮地獄、具受衆苦。

釈曰。依此經、念仏如憶父母、始得往生也。

⑥發覺淨心經 (大正12・51下—52上)

爾時、弥勒菩薩白仏言。世尊、如来歎弥陀如来、十種發心。於中隨念發願。若念當欲生彼、當即得生彼世界。何者、是十種發心、於彼处生。……若不生、無有是处。

釈曰。此非觀經中十念、此之十念、現在時作。觀經中十念、臨命終時作也。

⑦大集經 (『大方等大集經賢護分』大正13・875中下)

仏告賢護言。……彼阿弥陀如来應供等正覺、今在西方、經途去此、過百千億諸仏国土、有世界、名曰安樂。知是如来今現在彼……。彼善男子善女人……如是或至七日七夜、如我所聞、具足念故。是人必觀阿弥陀如来應供等正覺。……不能見者、若於夜分、或夢中、阿弥陀仏必當現。

釈曰。依此經、唯須假想、七日念仏、即得現見。非命終時也。

⑧往生經 (『灌頂隨願往生十方淨土經』大正21・529下)

……何故經中、讚歎阿弥陀刹……。仏告普広菩薩摩訶薩、……娑婆世界人、多貧濁、信向者小、習邪者多……。諸往生者、悉隨彼願、無不獲果。

釈曰。依此經、一向專想西方、即往生也。

⑨藥師經 (『灌頂拔除過罪生死得度經』大正21・533中下)

……願欲往生西方阿弥陀仏国者、憶念晝夜、若一日…七日、……欲終之日、有八菩薩…皆當飛往迎其精神。不逕八難、生蓮華中、自然音樂而相娛樂。

釈曰。依此經、七日念仏、縱令生悔、聞藥師仏名、還得生也。

⑩般舟經 (『般舟三昧經』三卷本、大正13・905中)

……菩薩於是間国土、阿弥陀仏、數數念。用是念故、見阿弥陀仏……。欲生我国者、常念我數數、常當專念仏名。所得功德、諸行之中、最為殊勝。

釈曰。依此經、亦得念仏往生也。

⑪大阿弥陀經 (大正12・311上中)

當持齋戒一心清淨、晝夜常念、欲生阿弥陀仏国、十日十夜不斷絶……悉令往生阿弥陀仏国。……計欲度脱身者……莫与婦女同床、自端正身心……。念生阿弥陀仏国、一日一夜不斷絶者、壽終皆往生其国、在七宝浴池、蓮華中化生。

釈曰。依此経、若能念仏持戒、不与女人同床、下乃至一日一夜、亦得生也。

⑫無量清浄覚経（『無量清浄平等覚経』大正12・299中下）

……聞我說浄土法門…如拔出者、当知、此人過去宿命已作仏道也。若復有人…都不生信者…、我說此人、未可得解脱也。

釈曰。依此経、聞説浄土、生信樂者、普是過去供養仏来。由往昔因、現在乃至十念悉得往生。

第二引論有七部

①往生論（『無量寿経優波提舎』大正26・231中、233上）

修五念門。……何等五念。一者礼拝、二者讚嘆、三者作願、四者觀察、五者廻向。釈曰此是因門。

復有五種門。……何者五門。一者近門、二者大会衆門、三者宅門、四者屋門、五者園林遊戲池門。此五種門、初四種門、成就入功德、第五門成就出功德……。

釈曰。此是果門也。

②起信論（『大乘起信論』大正32・583上）

復次衆生初学是法……意欲退者、……謂以專意念仏因縁、随願得生他方仏土……。如修多羅説、若人專念西方極樂世界阿弥陀仏、即得往生……。

釈曰。依此論、此間修信心不成就者、教就西方修習。此豈十解已去菩薩也。

③十住毘婆娑論（大正26・43上一下）

阿弥陀仏本願如是。若人念我称名自帰、……是故常応憶念。以偈称讚。

無量光明慧 身如真金山……願諸衆生類 皆亦悉当得  
讚觀音勢至二菩薩偈（不詳）

釈曰。依此論、唯讚歎礼拝、即得往生。

④弥陀仏偈（『後出阿弥陀仏偈』大正12・364中下）

唯念法蔵比丘 乃從世饒王 発願喻諸仏 誓二十四章……受此無量制 世世稽首行

釈曰。一切経中、有此礼文。

⑤宝性論（『究竟一乘宝性論』大正31・848上）

依此諸功德 願於命終時 得見弥陀仏 無辺功德身……証無上菩提

⑥禅那囉多三蔵別訳龍樹讚礼阿弥陀仏文。有十二礼（『往生礼讚偈』大正47・442上一下）

至心帰命礼西方阿弥陀仏 稽首天人所恭敬 阿弥陀仙兩足尊……願共諸衆生 往生安樂国

⑦撰大乘論（『撰大乘論釈』大正31・270上）

衆宝界如覚徳業 我說句義所生善 因此願悉見弥陀 由得浄眼成正覚

## 2 宗曉『樂邦文類』の専談浄土経論

『樂邦文類』五卷（1200年）は中国浄土教における唯一の類聚である<sup>(6)</sup>。本書の構成は浄土経呪論・序跋・文・讚・記碑・伝・雑文・賦銘・偈・頌・詩・詞に分類された総数250点ほどの引文からなる。その多くは宋代の資料であるから、宋代浄土思想の様相を端的に示すだけでなく、それ以前の隋唐代からの変遷も読み取ることができ、さらに後の浄土思想史に大きな影響を与えた。従って、本書

は単なる資料集ではなく、夫々を歴史的に配列し、従来の研究を加味すれば、中国浄土思想史そのものを示唆するほどのものである<sup>7)</sup>

その一つが「専談浄土経論」の査定である。編者宗暁は本書冒頭に「経凡四十六処」「呪凡一十道」「論凡六処」と専談浄土経論16部を目録として挙げ、次いで一々の引文を載せる。しかもその30文ほどに何ゆえ浄土経論と査定したかを先師の註釈・自釈で附註する。引文数は60余点と紙幅を取るため、本稿では引文・呪を省略し、経論名・引文標題と註釈・自釈を挙げるにとどめる。引文の内容は宗暁が附した標題で略々察せられるし、呪は他の二資料に認められないからである。

『樂邦文類』卷一 (大正47・149下-165上)

#### 大蔵専談浄土経論目録

無量清浄平等覚経、(大)阿弥陀経、無量寿経、大宝積経無量寿如来会、大乘無量寿莊嚴経、阿弥陀経、称讚浄土仏摂受経、觀無量寿仏経、後出阿弥陀仏偈経、阿弥陀鼓音声王陀羅尼経、般舟三昧経、如来烏瑟膩沙最勝総持経、無量寿如来修觀行供養儀軌、無量寿優波提舍論、阿弥陀経不思議神力伝、集諸経礼懺儀。以上、経論伝集一十六種、並専談浄土。

(経凡四十六処)

- ①法華経 弥陀迹中化縁之始 (大正9・22上-25下), 台宗, 妙玄。
- ②悲華経 三聖因願授記名号 (大正3・174下-186下抄出)
- ③一向出生菩薩経 弥陀因行成就衆生 (大正19・701中下)
- ④無量寿経 法蔵比丘発願莊嚴妙土 (大正12・266下-270上)
- ⑤弥陀偈経 弥陀本願取土之相 (大正12・364中下)
- ⑥首楞嚴経 勢至獲念仏円通 (大正19・128上中), 長水疏, 集解。
- ⑦鼓音王経 弥陀国城父母親属 (大正12・352中下), 孤山弥陀疏。
- ⑧阿弥陀経 極樂過十万億仏土 (大正12・346下), 雪川新疏, 十疑論, 自信録。
- ⑨阿弥陀経 七日不乱感仏往生 (大正12・347中), 孤山疏, 雪川疏。
- ⑩觀無量寿経 行三種業得生西方 (大正12・341下), 天台觀経疏。
- ⑪觀無量寿経 初修日觀送想西方 (大正12・341下-342上), 觀経疏, 妙宗。
- ⑫觀無量寿経 第八像觀約心觀仏 (大正12・343上), 觀経疏, 妙宗釈, 融心解。
- ⑬觀無量寿経 具三種心即得往生 (大正12・344下), 觀経疏, 善導釈。
- ⑭觀無量寿経 下品下生十念功成 (大正12・346上), 觀経疏, 妙宗, 十疑論。
- ⑮觀無量寿経 韋提侍女皆得往生 (大正12・346上中), 觀経疏, 十疑論。
- ⑯(大)阿弥陀経 以疑惑心生西方界辺 (大正12・310上中)
- ⑰無量寿経 不了仏智胎生受生 (大正12・278上中), ⑰-2(大)阿弥陀経 (310下-311上), 觀経疏, 妙宗。
- ⑱菩薩処胎経 生染著心墮懈慢国 (大正12・1028上), 弥陀経鈔。
- ⑲平等覚経 浄土声聞修行証果 (大正11・289上), ⑲-2 弥陀経 (大正12・347中),  
⑲-3 觀経 (大正12・345中下), 十疑論, 觀経疏。
- ⑳無量寿経 揀五逆謗法不得往生 (大正12・268上) 下卷 (272中), 觀経疏。

- ②①無量寿經 三輩修因往生之相 (大正12・272中下) 觀經疏, 孤山刊正記, 靈芝, 輔正解。
- ②②無量寿經 較量二土修善不同 (大正12・277中下)
- ②③無量寿經 往生浄土菩薩衆多 (大正12・278中下)
- ②④無量寿經 法滅留經百歲度人 (大正12・279上), ②④-2 (称揚諸仏功德經, 大正14・99上中)
- ②⑤無量寿經 勸各精進努力求之 (大正12・274中)
- ②⑥無量寿經 無量寿仏光明普照 (大正12・270上中)
- ②⑦無量寿經 宝鉢飲食自然盈滿 (大正12・271中下), ②⑦-2 平等覺經 (大正12・287上中),  
②⑦-3 大弥陀經 (大正12・307上), ②⑦-4 往生論 (大正26・231上), 安養記。
- ②⑧華嚴經 較量二土晝夜長短 (八〇華嚴, 大正10・241上), ②⑧-2 弥陀經 (大正12・347上),  
慈恩弥陀通贊, 雪川新疏, 自釈。
- ②⑨文殊説般若經 修一行三昧專称仏名 (大正8・731上) 天台止觀, 輔行釈。
- ②⑩般舟經 修仏立三昧專念弥陀 (大正13・905上-906中), 止觀, 輔行釈, 四明融心解。
- ②⑪方等大集經 修仏立三昧中道觀法 (大正13・877上中), 自釈。
- ②⑫華嚴經 解脱長者得唯心念仏門 (四〇華嚴, 大正10・687下), 清涼貞元疏。
- ②⑬華嚴經 依普賢願主得生極樂 (大正10・844中-846下), 下偈 (848上), 貞元疏, 行願鈔, 道純法師。
- ②⑭法華經 聞經修行即往安樂世界 (大正9・54中下), 荊溪法華記。
- ②⑮大宝積經 発十種心得生極樂 (大正11・528中下)
- ②⑯随願往生經 娑婆濁惡偏讚西方 (大正21・529下)
- ②⑰大集日藏經 念仏随心觀見大小 (大正13・285下-286上), 自釈 (慈雲懺主念仏方法)。
- ②⑱目連所問經 無量寿国易往易取 (『安樂集』卷上, 大正47・14上)
- ②⑲十往生經 念仏之人菩薩守護 (続藏87・4)
- ②⑳觀仏三昧經 仏記文殊当生極樂 (大正15・687下-689上)
- ㉑文殊発願經 文殊発願求生極樂 (大正10・879下)
- ㉒入楞伽經 仏懸記龍樹生極樂国 (大正16・627下)
- ㉓善信摩親經 善信厭女求生浄土 (『経律異相』卷38, 大正53・205上一下)
- ㉔首楞嚴經 情想多少論報高下 (大正19・143中下)
- ㉕守護国界主經 命終善惡感報優劣 (大正19・574上)
- (呪凡一十道) 省略
- (論凡六処)
- ①無量寿論 往生偈及五門修法 (大正26・230下-233上)
- ②毘婆沙論 念仏為易行道 (論第四は卷5, 大正26・41中, 43上中), 十疑論。
- ③大智度論 樂多集功德者求生浄土 (論四十三は卷38, 大正25・342上, 論四十五は卷40, 349下-350上),  
妙宗鈔, 十疑論。
- ④大智度論 釈迦弥陀各有浄穢国土 (論三十六は卷32, 302下, 三十八卷は卷34, 312中),  
④-2 涅槃經 (大正12・752下), 觀經疏, 妙宗釈。
- ⑤起信論 娑婆不值仏專勸念仏 (大正32・583上), 賢首起信疏, 四明融心解。

- ⑥思惟要略法 利鈍二根觀仏相好 (大正15・299下—300上), 自釈。  
 ⑦阿弥陀仏尊号 (『浄土文』巻4, 大正47・262上中, 263中下), 自釈 (宝王論, 直指浄土決疑集, 浄土文)。

### 3 袁宏道『西方合論』の経緯之浄土経論

明代を代表する浄土思想家、袁宏道の『西方合論』十巻は十門よりなり、浄土経典の査定は巻三、「第三部類門」に収まる。彼はそこで浄土経典を四つに分類「一経中之経、二経中之緯、三緯中之経、四緯中之緯」し、査定する。それは法然の正依・傍明と一脈通ずる見解である。そこに居士袁宏道独自の立場が窺える。本稿では彼が重視した一～三までの引文抄出と彼の言及を挙げ、「四緯中之緯」は弥陀浄土の引文ではないので、経名のみにとどめる。

『西方合論』巻三 (大正47・395中—398中)

今約諸経、但言西方大事者、一概収入、分経緯二義。……一経中之経。二経中之緯。三緯中之経。四緯中之緯。

#### 一 経中之経者

①—3 一無量平等清浄覚経。①二無量寿経。①—2 三(大)阿弥陀経。四無量寿莊嚴経。五出宝積経第十八経、名無量寿如来会。(六即大阿弥陀経、龍舒居士)。

②仏説阿弥陀経。②—1 二称讃浄土仏撰受経。

③観無量寿経。

然三種経、皆専為西方起教。如天中之天、人中之王。

#### 二 経中之緯者。

①鼓音声王経。

②後出阿弥陀仏偈経。

二経亦専言浄土。言義較前甚略。判入緯類。又鼓音意重持呪。偈経是伽陀部。非教本故。

#### 三 緯中之経者。

①華嚴経 (四〇華嚴, 大正10・844中—846下, 687下)

普賢菩薩……発大十願。……惟此願王……即得往生極楽世界……。

又解脱長者云。我若欲見安楽世界、無量寿如来、随意即見。……

②法華経 (大正9・54下)

聞是経典、如説修行、於此命終、即往安楽世界阿弥陀仏……。

③楞嚴経 (『大仏頂首楞嚴経』大正19・128上中)

我憶往昔恒河沙劫、有仏出世、名無量光。十二如来相繼一劫。其最後仏、名超日月光。……

④宝積経 (『大宝積経発勝志樂会』大正11・528中下)

汝今当念西方世界阿弥陀仏、常勤精進、当得仏道。……人中命終已、得生安楽国、面奉阿弥陀、無畏成菩提。又仏告弥勒。発十種心、往生極楽……。

⑤般舟三昧経 (大正13・905上)

若沙門白衣、所聞西方阿弥陀仏刹、常念彼方仏……若七日七夜。過七日已後、見阿弥陀仏。……

## ⑥観仏三昧経（不詳。大正15・687下—689上の取意？『樂邦文類』④⑩参照）

文殊自叙宿因，謂念仏三昧，当生浄土。世尊復記之曰，汝当往生極樂世界。

## ⑦大集経賢護品（不詳。大正13・875中—876中の取意？『浄土論』⑦参照）

求無上菩提者，応修念仏禅三昧。偈云，若人称念弥陀仏，号曰無上深妙禅……。

## ⑧十住断結経（大正10・999中下）

西方去此無数国土，有仏名無量寿。其土清浄……。

## ⑨如来不思議境界経（大正10・911下）

菩薩了知諸仏及一切法，皆惟心量。……，捨身速生妙喜世界，或生極樂浄土中。

## ⑩随願往生経（大正21・529下？）

仏国無量，専求極樂者何。一以因勝，十念為因故。一以勝縁，四十八願普度衆生故。

## ⑪称揚諸仏功德経（大正14・99上）

若有得聞無量寿如来名者，一心信樂……魔不能壞彼正覚心。又云，……，命終之後，往生彼刹。

## ⑫大雲経（『大方等無想経』，大正12・1106下）

善男子。於此西方，有一世界，名曰安樂。其土有仏，号無量寿。今現在，常為衆生，広宣……。

## ⑬入楞伽経（大正16・627下）

大慧汝当知……南天竺国中 大名徳比丘 厥号为龍樹……得初歡喜地 往生安樂国

## ⑭大悲経（大正12・955下）

有比丘，名祈婆迦……已而命終，生於西方過百千億世界無量寿仏国，以後成仏，号無垢光如来。

四 緯中之緯：いずれも諸仏の念仏を説く（引文略）。

## ①華嚴経 毘盧遮那品（八〇華嚴，大正10・56中），光明覚品（64上），賢首品（76中下），十無盡蔵品

（114中），兜率偈讚品（123中），十回向品（174下以下の取意？），十地品（178中以下の取意？），不思議法品（243中下），入法界品（334上一下）。

## ②法華経（大正9・9上，37中下），③浄名経（大正14・538上一下，553上中），④涅槃経（大正12・468上，515

上？），⑤大悲経（大正12・958上中？），⑥大般若経（卷575，大正7・972上），⑦坐禅三昧経（大正15・277上

中取意？），⑧増一阿含経（不詳。但し，引文の四事供養は大正2・557上，610上以下，656上以下），⑨文殊般若

経（大正8・731中），⑩大集経（大正13・285下），⑪法華三昧観経（不詳），⑫那先経（大正32・701下—702上，

707中）。

## 4 浄土経論対照表と要点

浄土経論対照表

(浄土論)	(樂邦文類)	(西方合論)	(浄土論)	(樂邦文類)	(西方合論)
無量寿経 ①	④①⑦②⑦~②⑦	経中之経①	法華経	①③④	緯中之経②緯中之緯②
大阿弥陀経 ①①	①⑥①⑦-2②⑦-3	" ①-2	華嚴経(八〇・四〇華嚴)	②⑧③②③③	" ① " ①
無量清浄覚経⑫	①⑨②⑦-2	" ①-3	文殊発願経	④①	
観無量寿経 ②	⑩~①⑤①⑨-3	" ③	如来不思議境界経		" ⑨
阿弥陀経 ③	⑧⑨①⑨-2②⑧-2	" ②	首楞嚴経	⑥④④	" ③
鼓音声王経 ④	⑦	経中之緯①	観仏三昧経	④⑩	" ⑥
弥陀偈経 論④	⑤	" ②	入楞伽経	④②	" ⑬
称揚諸仏功德経⑤	②④-2	緯中之経①①	文殊般若経	②⑨	" ⑨
発覚浄心経 ⑥			大集経(日藏分)	③⑦	" ⑩
大宝積経(発勝志楽会)	③⑤	" ④		②悲華経③出生菩薩経⑬菩薩処胎経	
般舟三昧経 ⑩	③⑩	" ⑤		⑬目連所問経⑭十往生経⑮善信摩親	
大集経(賢護分)⑦	③①	" ⑦		経, ⑮守護国界主経 論④-2涅槃経	
随願往生経 ⑧	③⑥	" ⑩		緯中之経⑧十住断結経	
薬師経⑨				⑫大雲経⑭大悲経	
				緯中之緯③~⑧, ⑪⑫	
(浄土論)	(樂邦文類)		(浄土論)	(樂邦文類)	
①往生論	①無量寿論, 経②⑦-4		⑤宝性論	⑤起信論	
②起信論	②毘婆沙論		⑥十二礼	⑥思惟要略法	
③十住畏婆論	③大智度論		⑦撰大乘論	⑦阿弥陀尊号	
④弥陀仏偈	④大智度論				

以上の三資料夫々の引文内容・経文と引文の校合・配列・附註・自釈、他処の引用等を考証すると、三資料の独自性が客観的に理解できる。さらに、各経論の著名な諸師、たとえば盧山慧遠・智顛・善導・慧日・延寿・知礼・遵式・株宏などの引用等を勘案すると、中国浄土教所依の経論の全体像が浮び上がる。それは大変な作業で、そのゆとりはない。本稿ではすでに抄出した引文と対照表から知られる諸点を浄土経典に限って指摘するにとどめ、その後の作業の第一歩としよう。

まず対照表から知られる特徴は、第一に共通する経典は『浄土論』の『薬師経』(『灌頂拔除過罪生死得度経』)を除く十一経である。それによって、迦才『浄土論』の項ですでに述べた「十二経(七論)」は中国浄土教正依の一部という指摘が資料的に立証されよう。加うるに、『樂邦文類』『西方合論』

が査定したその他の経典を知ることによって、迦才査定の独自性はさらに鮮明となる。後に指摘するように、他の二資料の中には阿弥陀仏・極楽を説かない経典も浄土経典と査定されるが、迦才の「十二経（七論）」はすべて阿弥陀仏・極楽を説く代表的経典である。このことは迦才は専ら弥陀浄土思想のみを信仰して浄土経典を査定したのに対して、宗暁・袁宏道はおそらく仏教全体を前提にして浄土経典を考えたことを意味する。迦才は道綽の影響を強く受けた専一的浄土教、それより時代が大きく隔たる宗暁・袁宏道はその時代社会を背景とした融合的浄土教の立場が色濃く出ている。この点で迦才は法然・親鸞へと展開する線上に位置する。迦才の「十二経七論」は法然によってさらに「三経一論」と選択されたが、多様な展開をみせた中国浄土教の中では最も峻別された浄土経論の査定である。しかし、諸宗融合の風潮の中で浄土経典を考えた宗暁・袁宏道にはそれはできなかった。そのことは後に述べよう。

第二に、十一経の中でも最も重要とされたのは浄土三部経である。迦才の十二経は浄土三部経から始まり、最後は無量寿経異本『大阿弥陀経』『無量清浄覚経』で終る。宗暁の引文数は「経凡四十六処」（実数は53処）の中、『無量寿経』10処、『大阿弥陀経』3処、『平等覚経』2処、『観無量寿経』7処、『阿弥陀経』4処が他経に較べて非常に多い。袁宏道に至っては浄土三部経諸本こそ正依の経典（「天中之天，人中之王」と評価する。このように三資料とも浄土三部経を最重視しているが、就中、宗暁の引文数では無量寿経が圧倒的に多い。これをインド・日本浄土教に照らすと、インドでも300部に近い浄土経論の中でも原始浄土思想の成立に関しては浄土三部経（正確には無量寿経・阿弥陀経、次いで観無量寿経）<sup>(8)</sup>であるし、日本はそれ以上に浄土三部経（「三経一論」）であるから、広く三国浄土教正依の経典は浄土三部経であると明言してよい。われわれはインド・日本浄土教から類推して、これまで漠然と中国浄土教でも中心経典は浄土三部経であろうと予想しているが、それは三資料でも明瞭に現われている。ただ、従来の中国浄土教史から教えられることは、日本での隋唐代の観経研究、とりわけ善導『観経疏』の影響があまりにも大きいがゆえに、中国ではとくに『観無量寿経』が主流と考えられがちである<sup>(9)</sup>しかし、三資料で知る限り、『無量寿経』が重視されている。このことは浄土思想大系を経典から再構成する場合に、弥陀と浄土を詳細に説く『無量寿経』と自らの実践に係わる十六観法を説く『観無量寿経』の説相がそれぞれ学ぶ者の受容の態度に微妙に左右しているようである。浄土行を実修する者にとっては『観無量寿経』であるが、宗暁のように弥陀浄土の全体像を経典から抽出しようとするならば、『無量寿経』が詳細であり、それが引文数に現われている。なお、信仰の立場は異なるが、『楽邦文類』は親鸞『教行信証』に大きな暗示を与えたとされる<sup>(10)</sup>『教行信証』での浄土三部経の引文は『無量寿経』が圧倒的に多く<sup>(11)</sup>同じ文類としての共通の姿勢は文献学的立場では高く評価すべきである。

このように中国浄土教においても、浄土三部経は所依の経典として重視されていた。しかし、中国では日本と異なり、それのみによって浄土教は考えられていなかった。ここに中国浄土教独自の特徴がある。第三に、浄土三部経以外の経典も所依とされた点である。主なものとしては、まず『弥陀偈経』（『後出阿弥陀仏偈（経）』）『鼓音声王経』である。いずれも全篇阿弥陀仏を説くから、主要な浄土経典である。宗暁は他経典と同等に評価するが、迦才は『弥陀経偈』を論④「一切経中弥陀仏偈」とし、袁宏道は「言義較前甚略……。又鼓音意，重持呪。偈経是伽陀部。非教本故」と浄土

三部経より低く評価する。ここに偈文・呪〔真言〕評価の三者微妙な違いが認められる。迦才の挙げるその他の経典（『浄土論』⑤～⑩）についても、いずれも弥陀浄土の念仏〔称揚・発心・見仏〕往生を説くから重要な浄土経典である。

第四に、迦才の挙げた十二経がいずれも念仏往生を説くことは、われわれに中国浄土教の主要な行業が念仏であることを示唆する。迦才の浄土経典を基点として、すべての引文内容を読み直すと、その多くが念仏往生を説いていることに気づく。この点はとくに迦才の十二経に著しく表われている。中には厳密には阿弥陀仏の念仏を説かない引文もあるが、しかし、彼の自釈はすべて念仏と理解した説明である。しかも臨終念仏ではなく、現在念仏と自釈する点は、彼の別時意批判と呼応して<sup>(12)</sup>注意されてよい。専ら弥陀信仰のみを考えた迦才は十二経すべてを念仏往生の経典として選択した。宗暁の引文には、弥陀の化縁から始まり、弥陀と極楽の様相を説く引文も認められるから、すべてが念仏往生の引文ではない。これは弥陀信仰の立場ではなく、客観的に浄土思想大系を諸経典から抽出し構成しようとした文献学的立場の宗暁の蒐集意図に依る。しかし、全体的にはやはり念仏往生の引文が多い。袁宏道の査定では、全く弥陀浄土を説かない「緯中之緯」十二経がすべて念仏功德の引文であることを知るだけで充分であろう。このように、少し三資料の引文内容を知れば、念仏往生についての記述が非常に多い。すでに従来の研究では、念仏の概念について観念・観想・口称等と精緻に分析され<sup>(13)</sup>また念仏往生だけでなく、諸行往生・念仏滅罪などの引文も認められるから、細かな論証を必要とするが、しかし、全体的特徴として念仏往生が中心概念であることは容認されよい。

以上が、三資料から知られた浄土経典の要点である。

日本では、法然・親鸞が浄土三部経を正依として独創的な浄土教を確立する同時代、中国浄土教は様相を大きく変えた。諸宗融合の浄土教である。この特徴は宗暁『樂邦文類』の専談浄土教論に顕著に表れている。次に宗暁・袁宏道の査定を見てみよう。

迦才になく、宗暁・袁宏道に共通する浄土経典は『法華経』『華嚴経』（諸本）『首楞嚴経』『観仏三昧経』『入楞伽経』『文殊般若経』『大集経日蔵分』の七経である。これらの特徴の第一は、浄土経典というよりは、いずれも中国仏教全体の中での主要な経典という点である。就中、『法華経』『華嚴経』は天台・華嚴宗の根本経典であり、天台僧宗暁はとくに多くの天台系註疏を附註し、居士袁宏道は緯中之緯①で十種に近い『華嚴経』引文を挙げる。このことは二資料とも中国浄土教を代表する典籍でありながらも、迦才のように純粹に浄土思想を信仰し領解したのではなく、天台思想・華嚴思想の範疇で浄土思想を理解したことを意味する。融合的浄土教での査定である。その他の経典に説く首楞嚴三昧・観仏三昧・如来蔵・阿羅耶識・一行三昧等の思想が中国諸宗で重視されたこともよく知られている。従って、ここでの七経はいずれも別な中心思想があり、それに附随的に一部浄土思想に言及した経典である。袁宏道が傍明の浄土経典（「緯中之経」）としたのは当を得ている。

第二に、七経の中で『文殊般若経』『大集日蔵分』は注意すべきである。両経共、引文はもとよりその他の個処にも浄土思想は認められない。両師は何ゆえ浄土経典と査定したのであろうか。

この場合、宗暁の附註・自釈がその理由を教えてくれる。

文殊説般若経 修一行三昧専称仏名

文殊言。云何一行三昧。仏言。……欲入一行三昧……繫心一仏、専称仏名……。

天台止観云。常坐三昧。出文殊説文殊問経。名一行三昧。九十日為一期……。

輔行釈曰。……経雖不局令向西方、既令専称一仏。諸教所讀多在弥陀故、以西方而為一準……。

大集日藏経 念仏随心観見大小

……。或一日夜、或七日夜、至心念仏、乃至見仏。小念見小、大念見大……。

此経所明念仏、雖不定指西方、竊見慈雲懺主念仏方法、引証念仏大小之義。故此録之。

前者には有名な智顛『摩訶止観』『常坐三昧』と湛然『輔行弘決』を挙げ、「専称仏名」の仏は阿弥陀仏ではないが、諸教は多く阿弥陀仏を讀ずるから阿弥陀仏を専称すべきであり、阿弥陀一仏を称える功德は十方仏の念仏と等しいと説明する。後者もこの経の念仏は阿弥陀仏を指していないが、慈雲遵式「念仏方法」で引証されているから阿弥陀仏の念仏と査定する。われわれはここに経文に説かれる不特定な仏の念仏が先覚の註釈を論拠として、阿弥陀仏の念仏と会通されたことを知る。弥陀浄土が説かれない④『首楞嚴経』⑤『守護国界主経』『(一切)浄土往生』の引文も同じ意図から浄土経典とされたのであろう。この特徴は袁宏道「緯中之緯」に査定された十二経に顕著に表われる。いずれの経文にも弥陀浄土は説かれていない。ここで説かれるのはすべて不特定な仏への念仏功德である。中国浄土教は多様な形態を有しながらも、中心的行業は念仏であった。この点は前の三資料の特徴、第四念仏往生をより強固に傍証する。

宗暁・袁宏道に共通する浄土経典の要点は以上である。それでは両師が独自に査定した浄土経典の特徴はどうであろうか。

宗暁の査定では、まず呪〔陀羅尼〕4部10処が特筆される<sup>(14)</sup>浄土思想に言及する経典の中でも密教部に属する経典は138部と過半数を占める<sup>(15)</sup>しかも大半は菩提流志・金剛智・不空・天息災(法賢)・法天など8世紀から10世紀の訳出である。宗暁には不空以降の密教の隆盛が色濃く影響したと思われる。その中でも『抜一切業障根本得生浄土呪』の呪文は敦煌写本や今日の中国仏教儀礼でも『阿弥陀経』の次に読誦されているから<sup>(16)</sup>浄土教において極めて重要な呪文であった。しかし、日本では陀羅尼読誦は否定される。次に、宗暁の査定には疑経・古佚経が認められる。③『目連所問経』③⑨『十往生経』④③『善信摩親経』である<sup>(17)</sup>彼は重要な浄土思想であれば、真偽に係わりなく浄土経典と査定したのであろう。彼には浄土思想を説くすべての資料、経典・真言・論書・疑経・古佚経から浄土思想大系を構成しようとした意図が強い。それは『楽邦文類』全体に認められる特徴でもある。それに対して袁宏道の査定には華嚴思想の影響が強く、総花的に蒐集した宗暁と異なり、そこに「経緯」(正依と傍明)の評価をした点に特徴がある。

## おわりに

多様な展開をみせた中国浄土教では如何なる経典を所依としていたか、その具体的な説相は何かを考える最初の手掛りとして、本稿では多少とも浄土経典を査定した三資料を取上げ、その要点を指摘した。

三資料に共通する要点としては、第一に迦才『浄土論』十二経七論の中、十一経が重要な経典で

ある。第二に、その中でも浄土三部経が最も重視されている。第三に、しかし、日本と異なる中国浄土教所依の経典は、浄土三部経のみではなく、それ以外の浄土思想を説く十数部から二十教部である。経典を絶対の真理とした中国浄土教はそれだけ多様な展開をみせたことになる。第四に、少し経文に当たると、多くは念仏往生を説いており、中国浄土教でも中心的行業は念仏である。これらの諸点はおそらく中国浄土教全体とも相応するであろう。

次に、宋代以降の宗暁・袁宏道に限っては、第一に諸宗融合、とくに天台・華嚴宗の中で考えられた浄土経典である。第二に、われわれは浄土経典と言えば直ちに弥陀浄土を説くと考えるが、両師の査定には弥陀浄土を説かない経典も浄土経典とされている。しかもその説相はいずれも不特定の仏への念仏功德である。この二点はおそらく融合的浄土教、諸師の引用経典とも相応するであろう。更に宗暁の査定には呪(真言)の強調、疑経・古佚経の引文、袁宏道には正依・傍明の評価に特徴が認められる。

最後に、三資料夫々の立場に一言すれば、迦才の十二経一論はいずれも重要な浄土思想を説くから、専一的浄土教の信仰の立場である。後に法然に影響を与えた所以である。宗暁の二十数部は弥陀の化縁から始まり、弥陀浄土の様相・多彩な行業と配列されているから、浄土思想大系を経典によって再構成した意図が読みとれる。極めて公正・客観的に蒐集した文類の文献学的立場である。袁宏道の立場は宗暁とは正反対で、そこに正依傍明〔経緯〕の個性が認められるから、哲学の立場である。そこに同じ浄土経典を考えながらも、三資料夫々の相違が認められる。三師の影響関係は資料的には明らかにできない。彼らは夫々の時代社会の中で自らの立場で浄土経典は何かを考えた。それゆえに共通する経典は中国浄土教所依の経典と考えてよいであろう。それではその他の諸師はどうであろうか。これからの課題は多い。

- (1) 源信『往生要集』「大文第三、明極樂証拠。……迦才師三卷『浄土論』引十二経七論……。私加云、法華経薬王品・四十華嚴経普賢願・目連所問経・三千仏名経・無字宝篋経・千手陀羅尼経・十一面経・不空羂索・如意論・随求・尊勝・無垢浄光・光明・阿弥陀等」(花山信勝『原本校註往生要集』109—110頁)参照。
- (2) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』136—164頁。
- (3) 名畑応順『迦才浄土論の研究』に詳しい。
- (4) 「小経釈第三」『漢語燈録』卷三(『浄土宗全書』卷九、358—359頁)。
- (5) 名畑応順、前掲書論攷篇 1頁。
- (6) 林五邦「樂邦文類解題」『国訳一切経』諸宗部七。
- (7) 拙稿「『樂邦文類』の浄土思想史的意義」『印仏研』第37巻第1号。
- (8) 藤田宏達、前掲書 5—7頁。
- (9) 小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』141頁、恵谷隆戒『浄土教の新研究』1—14頁。
- (10) 林五邦、前掲解題 15—16頁。
- (11) 藤田宏達『大無量寿経講究』155—158頁。
- (12) 名畑応順、前掲書論攷篇 122—142頁。
- (13) たとえば、藤原凌雪『念仏思想の研究』107頁以下。
- (14) 典拠のみを挙げる。①～④『無量寿如来観行供養儀軌』(大正19・67中下、69上中、71中、72中)、⑤⑥『烏瑟膩沙最勝総持経』(大正19・407中～408上、408中～409上)、⑦～⑨『不空羂索神変真言経』(大正20・319上中、322下～335下、384下、385下)、⑩『抜一切業障根本得生浄土呪』(大正12・351下)。

- (15) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』138—139頁。
- (16) 井ノ口泰淳「敦煌本『阿弥陀経』について」『宗教研究』第177号、鎌田茂雄『中国の仏教儀礼』17, 477—449頁。
- (17) 拙稿「浄土教関係疑經典の研究(一)」『札幌大谷短期大学紀要』第8号, 119, 136—137頁。厳密な経録研究では『随願往生経』『薬師経』『首楞嚴経』とその引文も疑経・転用と考えられるが、三師の時代にはすでに真撰とされていた(望月信亨『仏教經典成立史論』409—424, 493—509頁, 拙稿121—122, 130—131頁)。